その運命を守り抜く

グラタンサイダー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある事情により眠り続ける少年、木ノ崎（きのさき）　当（あたる）。

彼が次に目覚めた先は、ゲーム『スーパーロボット大戦オンライン』の中だった。

突然の事に戸惑いながらも状況を楽しむべく奮闘する当。今までロボットアニメを見た事などほぼゼロに等しかった当だが周囲に助けられながらもゲームを進めていく。

知識ゼロの少年は、果たして落とし込まれた世界の中で楽しむ事は出来るのか。

そして本当の意味で目覚める事は出来るのか。

基礎知識はガバガバです。

目　次

1、スコップとカヴで夜空を　――　1
2、無知は罪なのかどうなのか　―　17
3、新人パパの決心　――――　34

1、スコップとカヴで夜空を

――毎日毎日、穴を掘るのが俺達の仕事だ。

一日中洞窟に籠もって、腕が引きつるまで壁面をほじくり返して、何かしらの鉱石を見つけて漸く、その日の給料とタダ飯喰らいのレッテル解除が確保できる、そんな職場だった。

今日の俺は運が良かったらしい。何の鉱石だかは判らないが色は綺麗なんで持って行ったら、この坑道の持ち主が、持ってきた鉱物を鑑定する奴と一緒に目を回していたのだからレアリティは高かったのだろう。日当にもかなりのイロが付いていた。

日当は全て貯金に回して配給の食事を食べる。中にはわざわざ追加料金を支払って食事の質を上げている奴もいる。バフがどうとか、効率を上げる為らしいが、効果はあったのだろうか。多分ないだろうな。俺が来る前からここにいるんだから。

仕事も食事も芋洗いのような風呂も済ませると、皆タコ部屋で眠りにつく。寝る前に何か話をするといった行動は全く無く、皆部屋に入るなり寝てしまう。フレックスタイム制なのかここには必ず誰かが眠っているし、同じように坑道でも必ず誰かが掘っている。

空いた場所に寝転んで天井を見た。周りの寝息が聞こえてくる。設定でいびきもかけるというがそれに意味があるのだろうか。ないからここは静かなんだろうけど。

……静かだった。ここで眠っている連中はみんな意識を外にやっているのだろう。要するにログアウトだ。

（……寝まーす）

目を閉じる。眠くなる。便利な身体だ。外見も自由に変えられる。なんでかリアルの自分にソックリなものが出来上がってしまったけど。それで通しているけれど。

（……）

眠くなる。眠くなる。ついでにちょっとだけ祈る。

——明日も起きられますように——

——俺の名前は木ノ崎（きのさき）当（あたる）。

ログアウト出来なくなっただけの、いちプレイヤーだったりする。

――目が覚めてもタコ部屋だった。泣きたい訳じゃない。悲しくないし。むしろ現実に引き戻されるほうが問題があるかも知れない。何があるか判らないからね、俺の場合。

今日も穴を掘る仕事を進める。俺以外に誰も使わないからもはや専用と化したスコップを手に取り穴の入り口に向かう。

「お前、そこはドリルだろう」

俺のスコップを最初に見た同僚はそう言った。重くて持てないんだよ、格闘値に振ってないから。こうなるならキャラメイク？　の時に数字を増やしてたよ。

格闘値イコール筋力だなんて誰も教えてくれなかったぞ。ツルハシだって持てないんだ。

それでも格闘値はちょっとずつ延びている。全体的なレベルは上がってないけど。数値の最高値が確か４００だったから、道のりは遙かに遠い。今の数値？　聞かないで。チャーハンの具材を買う為に道端の１円玉を探している段階だから。

高さ２０メートルを超える入り口をくぐると、先客というか、昨日から掘り続けている奴の傍を慎重に通り過ぎる。

何しろコイツ、でかい。当然だ、ロボットなんだから。

赤いＴシャツ短パンを着た色白肌みたいな、いかにも量産の為ですよというようなシ

ンプル造形の、背丈２０メートルに届かない程度のロボット。が、武器の光る熱を持った剣で坑道を拡張している。

――ジム、と言うらしい。

ジムの傍を通って奥に。ジムの役目が坑道を広げる事なら、俺達人間は先に鉱物資源の在処をある程度見つけて置く事だ。

それでレアリティの高いものを見つければボーナス。違っても日当は出る。

――なんでこんな事をするのかと言えば、皆当然金が欲しいからだ。

欲しいものが高いから。その為に頑張って狩りをしたけど返り討ちにあったから。

高い買い物をして直後に破産したから。初心者狩りに遭ってすっからかんになったから。

理由は様々。辛いならこのゲームを辞めればいいのに、でも辞めずここで一発逆転を狙ってる。皆が皆そうじゃないけどな。俺みたいな理由の奴が一人でも居るのだろうか。居たら良いな。友達になりたい。

俺はと言えば、ログアウト出来ないから仕方なくというのもある。けどそれだけじゃない。

楽しみたいと思ったんだ。ゲームをするなんて生まれて初めての事だし。ロボットは大っきいし。

それに――

『スーパーロボット大戦オンラインの世界にようこそ！

このゲームはあなたが様々なロボットを操作して、時に助け合い、時に奪い合い、時には恋に落ちたりするかも知れない？　オープンワールドＲＰＧとなっております！

舞台は二つの地球と、地球とは異なる惑星ガイア。その三つの星に加え、その間を結ぶ宇宙までもがプレイエリア！　完全踏破？　やれるものならやってみろぃ！

条件さえ満たせばどんな機体も乗り放題！　鉄の城に乗って神に悪魔になるもよし！　サイコフレームの共振に導かれて刻を垣間見るもよし！　全てはあなたのプレイ次第！

プレイアブル機体は順次追加予定！　更には作品の垣根を越えた改造もオールオッケー！　あなたの目指す最強をその手に掴め！

さあ！　めくるめくスーパーロボットの世界へ！　いざ！　発進!!』

何を言っていたのだろうかあのお姉さんはと、その時の俺は思った。

なんとも極彩色な女性だった。往来では到底着て歩けないであろうデザインの衣服は所々に発光しているパーツがくっついていたし、髪に至ってはピンク色だった。目もカラーコンタクトだろうか金色。そんな格好をして親御さんは恥ずかしく思わないのだろうかと心配になる。ついでに言　うとテンションも高かった。ちょっとお友達には遠慮したい。

それにしてもと、見渡してみる。

何時も見ていた町並み、現実世界とは遙かに異なる構造物。大きな建物が乱立しているのは判るけど、何故その殆どが屋上を斜めに切ったような形をしているのか。あと全体的に水色。未来的と言って良い。

まるで水面のような地面を見た。どうやら橋のようだけど、スカートの人にこれはキツイだろう、自身の姿がある程度明確に映り込んでいる。セクハラ橋と名付けるべきか。地面に写る自分をみると、先程のお姉さんと似たようなデザインの服を着ていた。これではお姉さんを笑えない。

周囲を見渡す。目に映る面々が特徴的すぎる。中には水着のような、というか水着で闊歩する女性もいた。

ゲームだ。自分は今、ゲームの中にいる。

ゲームなんてやった事がない俺にはその時、どうすれば良いのか判らなかった。ゲー

ムなんて、誕生日にねだっても断固として断られ続けたから。先程振った数字は何の決定だったのだろうかと、振った今でも後悔している。

名前も決めた、外見も決めた、数字の割り振りも言われるがままを反逆して決めた。

いつか友達に教わった事がある。自分が自分のまま異世界に飛ばされる事を『転生』と呼ぶのだと。まさか自分がそうなるとは思ってもいなかったのだが。

自分はあれで、本当に死んでしまったのだろうか。だからゲームの世界に転生してしまったのだろうか。

「……」

思う所しかない。あんな理由で自分は死んでしまったのか、って。

そして何より、

（あんなのがまさか神様だった……？）

あの極彩色なお姉さんが転生によくあるという神様だったのだろうか。だとしたら随分と世界はアレである。不憫だ。死んでしまったというのにそんな事を考えるのもどうかと思うが。

まあ死んでしまったのは仕方ない、のだろう。思う所が全く解決されていないけれど

も。

まずは何をするべきだろうか。これはゲームで、ここは大きな町で、だとしたら何かあるだろうと、俺は人の多そうな場所に向かって歩き出した。

――そう、あのとき歩いてある場所にたどり着いたのが、俺のこのゲーム人生のはじまりだったんだ。

『畜生ッッ！　俺のマジンガーを舐めるなよ!?
俺のマジンガーはッ！　俺のマジンガーはッッッ!!
衝撃Z編仕様だ!!　こぉぉう子力ビィィィィィィィィィィィィィィムッッッ!!』

――そう、格好良かったんだ。あの時ふらっと入り込んだ闘技場。黒いロボットの目の部分から飛び出した光線を弾き飛ばし、その胴体を尖った体当たりでぶち抜いたあのロボットの姿が。

目に焼き付いて離れないあの姿。それで俺も乗りたいと思ったんだ、ロボットに。

このゲームならそれが出来るって知ってて、辞めるなんてできないだろう？　俺の場合ログアウトができないんだけど。

ついでに言うと皆には初期機体があったって言うんだ。ジムなんかがそう。ガチャとかルーレット？　そういうので少なくともロボットが一機無料でもらえたらしい、それも必ず。最低でもジムとかザクとかいうのが。

俺は出なかったよ。出たのは指輪型のコンピューター。画面が空中に出て色々と教えてくれる優れもので、装備の画面では「スパロボ図鑑」って名前だった。

これは助かってるんだよ。俺、ロボット全く知らないし。そのせいで学校ではハブられてたくらいだし。でも皆みたいにロボットが手に入っていればもっと楽に金稼ぎが出来たと思うんだ。

おかげで俺はスタート時点で金欠。聞きかじりでは「吹き溜まり」とすら言われているこの場所で、ドリルもツルハシも持てずスコップを手に鉱物探しだ。

このゲーム、俺にだけ厳しすぎる。あと後ろを通ったお前、何だよユ〇ボルって。図鑑に載ってないぞ。何の話だ教えてくれよ。

何時間坑道に潜っていたか思い出せない。最後に時計を見たのはいつだったか、体力はともかくやる気が削げてきた。ここらで一休みするべく俺は集会場に向かう事にする。集会場と言ってもただ単に掘り進んだら空洞があって、ちょうどいいから利用しようとだれかが言い出したってだけの話だそうだ。

空洞に入る。先客が何人か駄弁ってたり、おにぎり型のドーピングアイテムを掻き込んでいる姿があった。

この「吹き溜まり」とよばれる坑道。名前の通りにやる気の無い奴もいる。そういう奴はその辺で身体をログアウトされたまま放置されてたり。怖いんだよ。毎日忘れた頃にビクッ！　って動いてその後またログアウトで放置。怖いんだよ。何の意味があるんだよ。

後は邪魔してくる奴とか、そこらで遊んでる奴とかもいる。ゲームの中でもサボるのか。現実でもサボってんじゃないだろうな。仕事か勉強しろよ。心配になるからな、余

計なお世話だろうけど。

そういう連中は大抵が寄り集まって何かしている。お前らも現実で以下略。

今連中は良く判らない機械を動かすのに躍起になっていた。いや本当に良く判らない。なんだアレ。

色は全体的に汚れてカーキ色。カブとベスパを足して2で割って、タイヤの代わりに細長い手足をくっつけたような形状の……、何だアレ。膝が逆向いてるぞ。歩けるのかこれで。

指輪型の図鑑をかざす。図鑑はウィスパーモードという、俺にだけ聞こえる状態の音声で機体説明を読み上げてくれた。

『カヴ。Ｂオリジナル。

ＯＶＥＲＭＡＮキングゲイナーに登場したシルエットマシンの一種。シルエットエンジンとも呼称される。

一般的に広く流通されており、走破性能と積載量に優れ、これで大陸を横断した者もいるとか。

但し、該当機はスーパーロボット大戦オンラインの為に許可を得て作成されたものであり、作品中に似た機体の登場はあるが、該当機は出演していない』

――要するにこれもロボットらしい。というかカヴって。良いのか名前。ほぼまん

まだぞ。

俺が見ている事にサボりの連中は気づいた。「おい、スコップ」

「アタルだ」いつしかなんとも不名誉なあだ名が付いていた。「金稼がないのか？」

「素手でやるなんて非効率だろ。コイツにツルハシ持たせて楽しようと思ったんだが動かねえ」

見れば俺と会話している奴とは別の奴がしきりにペダルらしきものを踏んでいる。そういう所までバイクのようだ。余計に手と足になんの意味があるのか判らない。バイクじゃダメなのか。

「っていうか誰のだよ、良いのか勝手に」

「俺らがここに落ちぶれる前からあるらしいぜ。親方からの許可も貰った。コイツを動かしたヤツが貰って良いってさ」

「へぇ」

動かせばタダで機体をゲット。アーサー王の聖剣みたいだ。違うかな？

とにかく動かせれば良いのだ。動かせれば。

「お前やってみろよ」

「俺ぇ？」なんで俺が。

「俺たち全員でダメだったんだ。感じシルエットエンジンだからどこを触って良いかも

わかんねえ。だから初期機体も持てなかった可哀想なアタルちゃんならもしかしたらいけるんじゃねえかなあ？」

途中で嘲りに変わりながら俺に「乗れ」と言ってくる。良いのか？　おれがゲットしたらもうここに戻ってこないぞ？　馬鹿にする相手がいなくなるぞ？　新機体を買うまで貯めこんでんだから、移動の足がないだけで稼ぎは十分にあるんだから。幸運４００舐めんな。

相手の思い通りにカヴに近づき、触れてみる。冷たくない。あと硬くない。なんというかスベスベでペチペチしている感じだ。

ステップに足を掛けて跨がった。高い。膝が逆になった足のせいだ。中途半端に足を曲げやがって。しゃんとしろ。

小さいなりにロボットのような操縦桿があるのかと思えば、何のことはない。普通のバイクと殆ど変わらない。ボタンの数が多めかなってくらいで。

ボタンらしき部分をいくつか押してみる。反応はない。みんな試してんだろうな、もうな。

「ペダルだ」

「おう」

勧められた通りにペダルに足を掛ける。その瞬間、

――触れた先から何かが染みこんできた気がした――

「っ――!?」

鳥肌の様な感覚。驚いた俺はのけぞり、レバーを握っていたからか力一杯ペダルを踏み込んでいた。

視界が揺れる。尻が揺れる。――尻?

「……マジか」サボリの男が呆然と呟いた。

何人も試したんだろうな。それでだれも動かせなかった訳で。

だから驚いた訳だ。――俺が動かしたから――

「マジか」今度のマジかは俺。

すごい。何がすごいって達成感? やってやった感というか、この鳥足バイクに選ばれた感がすごい。これはもう笑うしかない。この場にいた連中がこぞって俺と、俺が動かした、薄汚れたカヴを見ている。

(見ろよ、もっと見ろ。お前らに出来なかった事をやってやったぞ)

――なんて事は言わない。もうギャラリーの中にはこの見た目ポンコツなカヴが動くと知るやなんというか、俺を殺して奪い取ろうとしているような目線がチラホラと窺

える。

「じゃあ動かしますか！」

動くのであれば動かすしかない。最初は歩いたりして練習するべきなんだろうが、最初っからぶん回した。

「さようなら吹き溜まり！　さようなら！」

坑道の中を駆け抜ける。荷物を取りに行く必要も無い。最初っからインベントリってヤツの中に全部入れておいたからだ。

速くてとても気持ちいい。作業服にタンクトップという格好だからか少し肌寒い気もする。

当然だった。高さ２０メートル程の出入口から見える空は暗かったんだ。月が空に見えている。夜だったのか。どんだけ潜ってたんだ俺。

俺を、俺とカヴを止めるヤツは誰も居ない。この場の殆どが自分の機体をなくしてここまで流れてきたからだ。

駆け出す。カヴが段差の所で大ジャンプ。坑道を飛び出して道を下り、俺を外の世界へ連れ出してくれる。

欲しいものとは違うが、これもまたゲームなんだろう。わらしべ長者かは判らない。いっそコイツだけを乗り回しても構わない。

それだけ俺は、この時はもう、コイツに心底惚れ込んでいた。

――こうして俺は自分だけの機体を手に入れて、漸くこの世界を走る事が出来るようになった。

ここでもう一度自己紹介をさせて欲しい。

俺の名前はアタル。ゲームの中でも外でもアタル。

これは俺の、もう一度の物語だ。

2、無知は罪なのかどうなのか

俺が〝吹き溜まり〟と呼ばれる坑道を離れたのは、このゲーム世界にやってきて数ヶ月目の事だった。

これまで自分にはロボットがなかったので、この世界に居るって事に少しだけ負い目？　引け目？　とにかくそれっぽい劣等感というかそんなものを感じていた訳だが、このロボット、カヴを手に入れてからはそれらをすっかり抜け落ちたように忘れて、とにかく駆け回ってはしゃいでいた。

いやホント、堪らないんだ。初めて自転車に乗れて行動範囲が広まったような、あの感覚が今も続いている。

無意味に飛び跳ねて無意味にカヴの手で物を拾ってみたりして、ふとした誤動作で高速形態に変形したりした。変形と言っても膝が逆になった脚がたたまれただけなんだけど、そうするとコイツ、少し浮く。

緑多めの虹色の光が輪になってカヴを浮かした時なんて、周りも気にせず素っ頓狂に叫んでいた気がする。誰もいなくて良かったよ。

浮いている時、高速形態のカヴはメチャクチャ速い。なんで脚ついてんだお前ってく

らい速い。あとヘルメットとシートベルトが欲しいくらい怖かった。いや慣れてないだけだったがな。

——そんなこんなでカヴに振り回されているような気がしなくもない俺だが、俺は今、

「オイいたか!?」

「いねえ！　名前分かるヤツは!?」

「名前なんて判んねえよ！　露天商とかタダの趣味（バカ）としか認識しねえだろ普通！」

「探せ！　絶対（ぜってえ）まだなんか持ってる筈だ！」

「フィールドに引きずり出してくびり殺してやらあ!!」

（ふっざけんなよ馬鹿共がぁ!!）

街に入って一週間目の今日。俺は今、空のコンテナの影で俺を追う蛮族的口調の連中をやり過ごしていた。

結論から言おう。金策に失敗した。やり過ぎてはいない。反応がやり過ぎなのは連中の方だ。

——少し説明させてくれ。

俺は金欠に苦しんでいた。

いや、あそこまで物価が高いとは思わなかった。カヴのスピードに任せて近くの街、俺がこの世界に来たスタート位置に戻ってきたのはいいものの、ジムの一機でも買えると思っていた俺が甘かったらしい。それだけ質素倹約してきた自負はあったんだ。ジムのパイロットに値段も聞いてたし。

でもジム、売ってねぇでやんの。

どうやらこの街はある程度ゲームの進んだプレイヤー向けのようで、知識ほぼゼロの俺でも聞いた事のある名前のロボットがチラホラと売っていたり歩いていたりする。どこもかしこもガンダムガンダム。どれだけいるんだオイ。図鑑がガンダムって単語をスクラッチしてるぞ。時折混じる他の単語がアクセントになって一曲出来上がってるぞ。

あれだけのガンダムが全部改造品じゃない正規品とかマジか。多すぎてどれが一番強いのか判らん。

いや、決まってないから皆色々なガンダムに乗ってるのか。みんな違って皆良いの

か。俺がガンダムの事判ってないけど。とりあえず角付いてるヤツをそう呼んでるだけだけど。後で出すがその時に出会った親切な女キャラに聞いてみれば改造で中身も外見もまるで変わるみたいだし、もう何が何やら。ガンダムだけど基はガンダムじゃないですよ、って事もある訳か。すごいな。余計に自分のロボットが欲しくなった。カヴが気に入らない訳ではないけど。小さいからな、カヴは。あれらに比べると。

とにかくこの町で生活は無理だ。物価が高すぎる。

とりあえず手持ちのアイテムで値がつきそうなものを売り払ってしまおうと考えた。ちょろまかした綺麗な鉱石なんかは高値がつくと期待したい。あと着替えもしたい。いつまでも作業服は嫌だ。最初の服もあるが、自分の中で何かが「ちょっと違う」と首を傾げていた。今も傾げているけど。

問題は自分がこの世界では基礎知識のない素人で、お上りさんのような振る舞いをしてしまう事だ。それを避けて溶け込む為に情報も要る。

前途は多難だが、少しでも行動しなければロボットは手に入らない。

そう、すこしやり過ぎるとしても、俺には金が要るのだ。

早速の金策に取りかかった俺だが、備え付けの店舗で売れたのは道すがらカヴで拾った廃材くらいのものだった。それはカヴの積載量限界までの、それこそ数があったのでちょっとした金額にはなったのだが、それはパーッと散財してしまった。頼みの綱だっ

た鉱石は取り扱い不可だった。あの吹き溜まりでしか扱ってくれないのだろうか。
新しく手に入れた資金の使い道としては当面の保存食、干し肉と、安めで頑丈そうな服、カーゴパンツにフライトジャケットと、残りの大半はカヴの改造だ。
当面の俺の足となってくれるカヴだが、如何せんボロい。だからプレイヤーが個人で経営する改造屋なる所にメンテナンスを依頼した。
一角を借りて水洗いをしてやると、カーキ色からライムグリーンに表面の色が変わった。大分汚れてた訳だな。それもそうだ、ロクに風呂も入らず炭鉱に潜りっぱなしの連中がこぞってベタベタと……いかん、もう一度洗いたくなってきた。
そんないろんなヤツに跨がられてきたカヴだが、実際に動かせたのは俺だけな訳で。そういうのってなんか良いな、と思いながら洗ってやっていたら店主の女キャラが話しかけてきた。費用によっては手の入れ具合が変わるのだとか。柔軟な対応だなぁ。
服と保存食代を抜いた後の資金を提示すると、メンテナンスだけでは釣り合わないと、要望に応じた改造、ちょっとしたプラスアルファも加えてくれる事になった。
こちらの望む通りの改造と言っても、何をどうしたら良いのか判らない。とりあえずコイツにしばらく乗る事を伝えてお任せしたら、カヴの積載量と足回りの馬力を強化してくれた。ホントに見た目も変わるのな、足と後ろの荷台が少しガッチリとした見た目になった。

それでも少し費用が余ると改造屋は言った。お釣りって概念がないのか、それとも商魂たくましいのか。どちらにせよここまで言ってくる彼女に、俺はお言葉に甘えて自分が初心者である事を伝え、心得的なものを教わった。

まずロボットと呼ぶな機体と呼べ。ニワカか外国人と見くびられる。

この街はガンダム、モビルスーツという種類の中でも高額なものがメインの街で、定住はまだお勧めできない。

ここは惑星ガイア。一応は初心者向けの機体が多く出回る星だが、この町のようにガチ勢なる面々や初心者狩りの集まる街も存在する。

機体の分布だが主なのは海を渡って南西にガンメン（但し殆どBオリジナルか敵の雑魚）、スーパー系のロボットなら陸路で北東。この町から出ている定期シャトルで他の地球にも行けるが、本来の地球（ノーヴル）は修羅と成金の国だからお勧め出来ない。

今の俺へのお勧めはもう一つの地球（アナザー）に渡ってカヴの種類（カテゴリ）であるシルエットマシンがいるシベリアか、海を東に渡ってゾイドなる動物型機体がいるＺｉ大陸。宇宙は絶対にダメ。

カヴは当然戦闘用ではないので狩りは出来ない。俺が稼ぎたいならフィールドに出てスカベンジ作業に没頭するか、プレイヤー間での取引で利益を狙うしかない。

……とまあこのくらいのタメになる話、欲しい情報を全て彼女一人から手に入れられた。お礼に代金をすこし上乗せしたら、「何かあったらまたウチに来い」と言ってくれた。

そして勧められるままに俺は行商のまねごとを始めた訳だ。まずはスカベンジ作業を始め、片っ端からインベントリの強化されたカヴに積み込んで、街の店屋ではなく個人に売る。街備え付けの店舗はＮＰＣらしく売値が一定、言ってしまえば最低値だったわけだ。努力には見合わない。

初めは「なんだコイツ」という対応だったが、スカベンジの結果が良いものだったのか、最初の塩対応は何処に、初めての商人プレイで店売りの倍以上の利益を叩きだした。仕入れに関しては流石にガチ勢と呼ばれる連中がたむろしてる事もあって、ゲームオーバーになった連中の放置された機体は多く、作業の結果は上々。それにしても幸運のパラメータ様々である。ドロップする部品は作業中は何が何やらよく判らなかったが結果としては全てがかなりの高値で売れた。幸運最大値（よんひゃく）すげぇ。

……で、だ。ここで調子に乗るのが俺、木ノ崎　当だったりする。

三日目辺りの商談？　そう言っていいのか本職の方に聞いてみたい所だが、とにかく

この辺りでちょっと効率化を考え出した。
というのもデッドストック、俺の方のインベントリに入っている鉱物の事だ。これを処分出来れば仕入れの量が増えると考えたんだ。
と言う訳で目の前の客に見せてみた。返答はこう。「石ころは要らない」……そりゃそうだ。
それ以降数回のお客も同じ対応だったので、鉱石は品物を買ってくれたお客にプレゼントという事にした。言ってしまえば押し付けである。この頃は知人程度に何度か顔を出してくれるお客が出始めたので、御用聞きから露天商に形態を変え、細々としたものの隣に鉱物を積んでみた。
すると売れた。売れに売れた。これは売れないだろうって思いながらもカヴに積んでいたロボット、もとい機体の何処の部位だか判らない部品も売れた。皆が必ず品物と一緒に鉱石を掴んで持って行く。
訳が分からなかった。でもすぐに判った。
だってもう石はないって言ったあの時、

「ジャパニウムもサクラダイトもねえとはどういう了見だコラア!!」

ガラの悪いプレイヤーに掴みかかられるとかあり得ないだろ。

……あの鉱石、相当の値打ちモノだったんだ。

そして至る現在。必死になってその場を逃げ出した俺は改造屋に駆け込んで逃げ道を教えて貰い、その日のうちにカヴで街を出た。

行き先はとある港町。とにかく大陸を渡りさえすれば追手は少なくなるだろうとのアドバイスからだ。

吹き溜まりを出た時もなかった追手がやってきたりした。どいつもこいつもデカい機体に乗りやがって羨ましい。だが馬鹿め。てめえらの入り込めない森の中でもカヴなら通れるんだよ。港町まで一直線で数日くらいとの事。徹夜でいけば連中の歩幅分は時間を稼げる筈だ。

カヴの足ってこう言う為のものなんだな。光る輪っか、フォトンマットで浮けない時の陸路用な訳か。

――そしてたどり着いた港町。幸運にも早速船がある。それも二隻。不幸にも追手

までこの町に来ている。ほぼ同時に到着したのかよ。最悪だ。
どっちに乗るべきだろうか。出来るなら追手の少ない方が良い。
……となれば、と。俺はコンテナの影から通りに出た。

――通りを進む時、肝心なのはオドオドしない事だと今は思う。
カヴに乗って通りを歩く。内心ではバレるなと願いながらも堂々と進む。
あと必要なのは聞き耳だ。通りをわざと歩いているのは話のとっかかりを聞く為だ。
人が集まりすぎる所で船の行き先は聞けない。追手の蛮族共が集まっている可能性があると考えたからだ。
どうしてもこの往来で船の行き先を突き止めたい。

「今度の船、護衛がアッガイってマジか？」
（！　来た！）
早速釣れた。あとは話しかけるだけだ。
「すんません、ちょっといいですか？」カヴをしゃがませて俺は、二人のプレイヤーに話しかけた。

「あ？　なんだコイツ」
「いきなりで申し訳ないです。船の護衛がアッガイって聞いて」
「ジオニストかよお前」
「ではないですけど」
　ジオニストって何だろう？　とにかくその辺は無視だ。第一アッガイすらも判らん。そこも無視。
「乗るの止めようかなって、どうですかね？」と言ってみる。相手に話をさせる為だ。
　内心では（頼む、乗ってくれ）と祈っている。
「その方が良いんじゃね？　信用ならねえよ」
　内心の祈りが万歳三唱に変わった。チョロすぎて逆に不安になる。
「なんか最近多くないすか？　アッガイ」と俺。勿論今迄穴の中にいた俺が知る訳がない。
「アレだよ、漫画の影響」
「博士とか２２５０マイルとかあったろ？　再版とかで熱籠もってんだよ」
「マジすか。個人的には好きだけど」話を合わせる。読んだ事はない。ごめんなさい。
「個人の趣味を公に持って来んなってハナシだよな」
　そう言って二人は笑った。これゲームだよな？　好きな機体選んじゃいけないの？

というか俺、今、嫌な奴に成り下がってる。
「アッガイの護衛はどっちの船すか？」本題に入る。
「何、どっか行くの？」
「なんかレアな鉱石タダ同然で配ってる奴がいるって聞いて」と俺が言う。「そいつを皆で追ってて」
「ああ噂の。道理でフツーの機体に乗ってない訳か」と、どこか納得された。
望み通りの展開だが面白くない。カヴのどこが普通でないのか。
「名前（ID）も顔写真（スクショ）もないんじゃ無理だろ」
「ですよね」同意する。危ない。俺にとっては現実でも、他の連中にとってはゲームだった。そんな方法があったとは。
「アッガイはＺｉ行の方だな、大きい方」
言われてそっちを見る。Ｚｉ行か。ちょうど良いな。
「でもそいつだってＺｉ行はやめてんじゃね？　徒党を組んで全員アッガイとかあり得ないだろ」
「地雷だ地雷」
「中身を改造してるとかじゃなくて？」改造屋の女キャラから仕入れたニワカ知識を披露する。

「アッガイ改造して外見変わらないとかどんだけ金かけてんだよ」
「マジでネメシス裏秘伝でも極めてんのかって話だよな」
また二人が笑う。うぅむ、ツボが判らん。
とにかく俺はあの船に乗らなきゃならんという事だ。
「あざっした。もう一隻に賭けてみますわ。あと中古のジム系に乗ってる奴って見ました？」
「そいつが噂の奴か。見てないな」
……重ねて礼を言って俺は船着き場に向かった。

まさかゲームで実際に船に乗る体験をするとは思わなかった。フェリーのような見た目通りにカヴを駐機スペースに固定し辺りを見渡すと、終わったら早くどけと言わんばかりに整然と機体が積み込まれていく。積載量は相当あるようだった。足元はしっかりしている筈なのに、どこか芯が揺らされているような感覚、生前でも味わった事はない。

Ｚｉ大陸へはゲーム内時間で一週間。それまでは平和だと船長のＮＰＣは言っていた。

ＮＰＣってすごい。プログラムだって判っててもその受け答えはほぼ人と変わらない滑らかさだ。さすがに話のレパートリーは一巡しちゃうが。

――甲板に出る。俺以外は部屋から出てこないのか、この視界を独り占めだった。

（……なんでくだらない嘘ついてんだ、俺）

唐突な自己嫌悪に陥った。何故おれはあの二人にあんな嘘をついただけでこんなに凹んでるんだ。

馬鹿だ。所詮はゲームだろう。ログアウト出来ないってだけで必死すぎだ。というより弱すぎだろうよ俺。今時嘘つかない人間が何処に居るっていうんだ。

「……死にたくないのか、やっぱり」

嘘の理由を考え、手すりに身を預けボーッと海を眺める。ゲームとは言え、俺にとっては現実だと言う事なのだろうか。

それともあんな目にあったからか。それこそ馬鹿だ。既に一度死んでるだろうが。

というか何で俺をあんなに血眼で追ってんだ、あの連中は。そんなにレア物が欲しいのか。初心者だとバレていたならそれも判るが、あそこまで初心者狩りに精を出す意味が、

「意味が判らん……！」
頭を振って切り替えるよう努めた。完全に逃げ切れた自負はある。
とにかく今はＺｉ大陸に行くんだ――と、その時だった。
「？」何かが迫って来ている。「!?」
海の中を白い線が走ったかと思えば爆発。大きな水柱を立てた。
「何だ!?」
『警報！　警報！　海賊襲来！　海賊襲来！
ログイン中の皆様は至急、各自の機体に搭乗し、係員の指示に従って待機して下さい！』
「海賊だぁ!?」
だから護衛が必要なのかと納得し、再度の水柱が上がる。
その水柱にどら焼きを頭にしたような機体がかち上げられていた。
「アッガイーーー！」
あれがアッガイかと頭ではなく心で理解した。アッガイが水柱にかち上げられて、また水面に向かって落ちていく。
「頑張れ！　頑張れアッガイ！」
初めて見たアッガイを何故か応援していた。頑張れアッガイ。お前が負けたら誰が

この船を守るんだ。俺が死んだら誰が漫画を買うんだ。
船が揺れた。魚雷が船の近くで爆発する。
「うっわ俺の方が危ねえ!?」
アッガイの応援なんてしてる暇は無かった。急ぎアナウンスの通り通路を行く。
船の通路は思っていたより狭かった。しかし俺が誰かとぶつかるという事は一度もなく。
「ひょっとしてみんなログアウトしてんのか!?」
ずるい。俺だってログアウトしたい。出来ないからこうも必死なんだが。
駐機スペースにいた俺のカヴをみると、ＮＰＣだろう船員キャラが俺のカヴにオレンジ色で俵型のフロートを取り付けていた。
「オイ！　アンタ何やってんだ！」
「お客様の機体ですね!?　この船が沈む前に発進して下さい！」
「沈むの!?」
「他のお客様はまだいらしてませんが貴方だけでも送り出して見せますよ!!」
「ログアウトしすぎだろぉ!?」
大丈夫だろうか。全員が機体に乗ったままログアウトしてんだろうか。
だが今は他人よりも自分の心配だった。俺がカヴに乗り込むと船員ＮＰＣがワイ

ヤーの固定を外していく。
「真ん中のカタパルトに乗って下さい！　撃ち出されたら直ぐにここから離れて！」
「アンタは！」
「私は大丈夫です！」
　船員ＮＰＣは敬礼した。
「私は船ですから」
「船員ーーー！」
　そのまま俺とカヴはまだ開ききっていない扉からカタパルトで射出され、フォトンマットでその場を逃げ出した。
　後で聞いた話だが、今回の海賊襲撃はイベントではなく人為的なものだったそうだ。被害総額は現実世界換算で数百万円。沈静化した今現在も海中のサルベージ作業は続き、現実に訴訟にまで発展しているという噂も。
　ゲームってヤバい。改めてそう思った。

3、新人パパの決心

「当(アタル)は貴方に任せるよ。俺にはもう要らないから」

……あの時、どうして立ち尽くすしか出来なかったのか。

株式会社マイヤー。株式会社Ｖが〝スーパーロボット大戦オンライン〟を運営するに辺り設立した完全子会社。そこで営業顧問として出向しているのが、この木ノ崎(木ノ崎)喜麒(きき)である。

そう、顧問である。本来ならばお飾り、というか閑職というイメージが強い役職の筈だが、喜麒の場合はその限りでなく。

「……」

身長１９０センチ、体重９５キロ。大学ラグビー部時代の体脂肪率を未だに保ち、木ノ崎一族由来の童顔を辛うじて受け継いだその表情は渋面で、視聴覚室代わりの会議室からその背を曲げて廊下へ歩み出た。

丁度廊下ですれ違った男性社員が話しかけた。「あれ、若旦那？　お得意先周りから直帰じゃなかったんですか？」
「おう。何時だ今」
「もう7時ですよ。午後の」
それを聞いて喜麒はスマートフォンを取り出し電源を入れ、自分でも確認する。
「……マジか」
男性社員がまさかといった顔をする。
「ひょっとして朝からっすか？」
「トイレ休憩挟んでもぶっ続けだよ畜生め」
男性社員が軽く引き、喜麒はそれを男性社員の背を軽く叩く事で跳ね飛ばした。
「オフィスだろ？　行くぞ」
「後片付けは？」
「張本人（バカ）にやらせてる」
張本人（バカ）と聞いて男性社員は納得した。ああ、またアイツか、と。
……木ノ崎　喜麒、社内での通称〝若旦那〟の担う仕事は、会社内及びゲーム運営の双方に於いて重要が過ぎた。

本社とのパイプ役は勿論の事、各社との権利関係の調整、更には門外漢である筈だのにゲームバランスの調整にまで若旦那の手は及んでいる。

そんな若旦那、喜麒は時折にこうして朝から晩まで会議室に缶詰めにされる場合がある。ゲームに新規参入させるアニメの鑑賞会だ。本来ならば喜麒だけでなく要所要所の重役が顔を付き合わせてワイワイとやるのだが、今回は提案者と喜麒の二人っきりだった。他の連中は皆逃げた形となる。畜生め、と再度喜麒は毒づいた。

「それで参入は決まったんですか」

「それ以前の問題だよ。あのバカの持ち込み企画だぞ」

「じゃあ却下ですか」

「あんなもんの許可なんざ取りたくねえよ。ったく、あれで作品選び以外は優秀なんだよなぁ畜生め」

喜麒がずんずんと進み、男性社員はそれを追う。その後をさらに後方から走って追いかける影があった。

「若旦那！」

後方から呼ばれ本当に嫌気が差したのか、喜麒が片手で顔を覆う。

今回喜麒を拘束した張本人である、女性社員がＤＶＤの束を抱えて走ってきていた。

走ってきて併走に入る女性社員は到着がてらに、「若旦那！　どうです今回の傑作は

！　早速のＧＯサインでしょう!?」
「あーお前の熱意は買うよ、うん。――だが却下だ馬鹿野郎」
　はぃ!?　と女性社員が聞き返してくる。
「どうしてですか若旦那!?　私納得いきません！」
「問題しかない作品抱えて来るんじゃねえよこの野郎。しまいにゃ泣くぞ馬鹿野郎」
「野郎じゃなくて女郎です！」
「じゃあこの馬鹿女郎」
「一体何見せられたんですか若旦那……」男性社員が引き気味に聞いてきた。
「知らないままでいた方が良い。まず第一にロボじゃねえ」

　……今日一日を費やして優秀な社員のご機嫌（バッグ）取りに精を出した喜麒がオフィスに戻ると、皆が一様に「若旦那、お帰りなさい」との言葉を投げてくる。喜麒が赴任してきた瞬間から若旦那と呼ばれているのだが、一応は上司である人間に対してあだ名呼びはいかがなものだろうかと思わなくもない。
　それでも許しているのは喜麒がその辺りに対して結局のところ大らかでありこのフレンドリー加減が嫌いではないという点と、彼らが実力主義で集められた集団だからであるというのが大きい。

詰まる所はご機嫌取りだ。こちらが合わせておけばこの面々は気分良く仕事をするし、こちらも気兼ねなく仕事が出来る、ウィンウィンの関係だ。

喜麒が宛がわれた机にどっかと尻を乗せると、同行していた男性社員が切り出した。

「じゃあ結局、今回は参戦作品なしですか」

「いや、ガサラキは参戦させる。ずいぶん前にアプリで参戦してたらしいしな。それに今の平均速度ならまだ間に合う。むしろ出すなら今しかない」

この場合、速度というのはゲーム内において機体群の機動性を指す。喜麒が門外漢ながらゲームバランスの調整に否応なしに口を出させられるのはここにある。

新規参入させるに当たってそのバランス感覚が絶妙なのだ。別の作品を基準とするアドバイスで、実際にプログラマーがそのニュアンスの通りに調整したところ、その作品がゲーム内でちょっとした流行となる事がままあり、その流行をメンテナンス毎に順次生み出し続けている以上、新規参入させる作品については、その会議毎に長時間の拘束を余儀なくされている。事ある度にアニメを見させられる訳だが、それは喜麒がその手のアニメに全くと言って疎いからで。

幼少期より大学にいたるまでラグビー漬け。そんな若旦那ですら頭ごなしに否定する作品群を持ち出す女性社員が、三人分のコーヒーを紙コップに注いで持ってきた。男二人が慌ててコーヒーを迎え入れる。

女性社員が呟いた。「ガサラキを入れるならアレも良いと思うんですよねぇ……」
「まだ言ってんのかよお前」
「諦めきれませんよ。あんなに良い作品なのに」
それを聞いて男性社員が喜麒に目を向けた。喜麒は無言でコーヒーをすする。
「お前はあれだ。もう少し常識と権利関係を学んでくれ。――あ、そうだ、なあ」
「なんですか?」呼ばれた男性社員が尋ねる。
「明日、俺、朝少し遅れるから」
「営業回りですか」
「いや、病院」
それを聞いて社員の男女両名が押し黙った。
「若旦那、それって」
「危険なんですか。甥っ子さん」
「心配すんな峠は越えてる。ちょっとばかし顔を見てくるだけだよ」
そう言って喜麒は残ったコーヒーを一息に飲み干して帰り支度を始めた。

翌日。喜麒が都内の病院敷地内駐車場にタクシーを着けたのは朝九時を回った直後の事だった。

病院に入り、もう顔見知りと言っても良い受付の事務員からは、いつも通りに心中察するといった表情を向けられ、それに対して喜麒は僅かに笑って見せた。

――所定の手続を経てエレベーターに乗り、集中治療室階層へ。白い壁とガラス窓で仕切られた個室の数々を通り過ぎ、目当ての人物が眠る一角で喜麒は息を洩らす。

「よう、おはようさん」

相手に聞こえる訳もないのに、喜麒はいつも通りに話しかけた。

「当、おじさんだぞ」

窓ガラス一枚向こうに木ノ崎　当が眠っていた。

当は応えない。頭部を中心に巻かれた包帯は揺るぎなくその頭部を覆い、繋がれた酸素吸入器と点滴チューブがその命をつなぎ止めている。

「覚えてねえだろうな。最後に会ったのが9年も前だ」

こんな事ならもっと頻繁に顔を出すべきだったと、喜麒はこの場に来る度に後悔する。

「一体いつまで寝てるつもりだ？　お前さんは」

磨き上げられたガラス窓に寄りかかった。

――喜麒の甥、木ノ崎　当が集中治療室に入ったのは今より数か月前になる。
喜麒が事態を知って駆けつけた時、当の父にして喜麒の弟はあの言葉を口にして、それ以降病院に来る事はなかった。
――あの時、どうして奴を殴らなかったのか。
口も開けられない程呆れていたのか。それとも手を出したらそれを理由に訴えてくると知っていたからか。
ふと人の気配を感じて首を捻った。この階担当の男性医師が会釈してくる。
こちらもと会釈を返すと、医師が口を開いた。
「以前にも言いましたが、峠はとうに越えて当君も安定しています。中に入られますか？」
「いえ、これから会社なんで今回は」
「……ご両親は、まだこちらには」
それについて喜麒は医師に対して言わなければならない事があった。
「先日、養子縁組が特例の上に大急ぎで認められまして。これからは自分が父親です」
医師が目を見開き、「では、もう……」
「言ったでしょう？　来る気なんてさらさらないって」
飄々としたその返しに、医師は俯いた。

「気にしないで下さい。それに先生もやりやすいでしょう。これからは窓口が直接本丸だ」
「――では木ノ崎さん」医師が周囲を見渡し、こちらの都合も考えてくれ、この場にて改まって切り出した。
「当君の脳死判定についてですが」
「！」
今度は喜麒が目を見開いた。
「判定は一つも通らない程、反応はまだ十分あります。あとは時間に委せるしかないとこちらは考えています」
「――ああ、そういう」
つい最悪の事態を考えてしまった。もうどうしようもないのかと。
どうやらこの医師は、当の本来の両親が会いに来ない理由を、もう絶望しての事だと考えているようだ。
真実は、彼が思う程に綺麗ではない。
「ですが植物状態が続くのでは薬物の使用も視野に入れる必要があるかと」
「安楽死ですか」
「こちらもそんな事はしたくない。ですが当院の院長がそれをしようとしている節があ

るんです」
　何故病院の院長が人の甥っ子、今は息子の命を左右出来るのか。生かすではなく殺す形で。
「当君の心臓が適応する患者が見つかりました。院長は国内、いえ、この病院での心臓移植手術成功例を欲しがっています」
「それは、」
「勿論許される訳がない。ですがこのまま目覚めなければ、安全な病院への転院を考えていただく可能性があります」
　耳を疑った。本来ならば病院とは安全な場所ではなかったのか。
「そんな事はさせません。こちらも手を尽くします。お父さんも希望を捨てないで下さい」
「――判りました。よろしくお願いします」

　朝の一件をどうにか胸に押し込んで、今日一日の仕事を片づけ家路につく。さしあたって急ぎの案件も会議もない現状ではこのくらいの時間帯、午後８時過ぎに家の扉を

開けられたのは、最近ではごく平均的と言えた。
「お帰りなさい」
「お帰り～」
愛する妻に迎えられ、リビングのソファで寝そべりアニメを見る中学2年になる愛しい娘に気楽な言葉を掛けられて、喜麒は椅子に座りネクタイを緩めた。
「ご飯は？」
「貰う」
少しして今日の夕飯、カレーと付け合わせのサラダが運ばれてくる。
家庭の味に暖かみを感じていると、それを見ていた妻が切り出した。
「ねえ、聞いてよ」
「どうした」
「絢麗（あうら）ったらね」
「ママ！」娘、絢麗が口を出してきた挟んでくる。「もう良いでしょやめたんだから！」
年頃の娘特有の悩みというやつなのだろうか。
「何だ。親として聞くべきか男として聞かないべきか、どっちだ」
「親として聞いて」と妻。
「終わった話蒸し返さないで！」と絢麗。

娘の懇願を無視して妻が、「この子ったら電脳化したいとか言い出したのよ」
喜麒が目を見開いて娘に向ける。「お前、そりゃあ……」
なんともとんでもない事を言い出した娘の絢麗は、ソファの背もたれに隠れてしまった。
電脳化。かつてアニメや漫画の、いわゆる空想の産物でしかなかった代物だが、現在では筋ジストロフィー対策等、様々な分野に広く身近になった医療・科学技術である。端的に言ってしまえば人体の脳を一つのコンピュータにしてしまう手術だ。当然リスクはあり、普及率はそれなりに落ち着いている。
それには理由があった。
「絢麗。無理だろそりゃあ」
「だから諦めたって言ったじゃん」消沈した声がソファから帰ってくる。
「いや法的にだ。２０歳（ハタチ）までは親の許可があっても特例なしに施術は許されなかった筈だぞ」
「……そうだっけ？」
電脳化手術は現在、肉体の発育・成長を鑑みて満２０歳を満たすまでは特別な理由なしにそれを施す事は法令で禁じられている。

おぉい、と喜麒は娘にツッコんだ。それも知らずに言い出したのか。妻の方を見ても同じように、え？　そうなの？　といった表情を向けている。

……おぉい。

「これからはとことん調べてから言い出せ。な？」

「おっかしいなぁ。ガッコの先生が言い出したから出来るもんだとばっかり」

「私もそう聞いていたからてっきり出来るものだと」

「……学校ってあれか、まさか部活の先生か」

似たもの親子の母娘が同時に肯定した。「あの野郎……」喜麒は思わず毒づく。

また問題を起こしたいのかあの教職不適格者は。以前もそうだった。

絢麗は吹奏楽部に所属しているのだが、その部活内ではイジメが横行していた。被害に遭っていた女子は身体・精神はおろか親族の形見であるフルートを破壊され、それ以降学校に来れなくなっている。その教師はそれを黙認どころか助長させることで学生の意思統一を図っていた恐れがあり、問題とされている。その教師は懲戒処分にもなっておらず、今も顧問を続けている。

余談だがそのフルート、骨董・美術品としての価値がとても高く、イジメに加担していた連中は少女の被害も含めた多額の損害賠償で目も当てられない状況に自ら陥っているらしい。

……それでも足りないと思うのは、一歩間違えれば絢麗が被害者になっていたからかもしれないからか。

とにかくそんな少女一人の人生を悪く左右させた輩の言う事をこの母娘は真に受けた事になる。

「もう辞めたらどうだ部活。電脳化を勧めるなんざ問題しかねえぞ」

「やだよ楽しいもん。成績だって落としてないじゃない」

「だが俺の読みが外れた事あったか？」

「ないけどさぁ」

食事をした気にならない。もうカレーの皿は空になっている。娘は寝転がってアニメを見続けていた。

「電脳化はナシだ、絢麗。お前もそれで納得してんだろ？」

「そうだよ？」

「ならそれでいいじゃねえか。母さんもそれでいいな？」

「そうよ？　最初から言ってるじゃない」

言っていただろうか。喜麒はまあいいと話題を変えていく。

「――そういや絢麗は何見てんだ」

「これ？　・ｈａｃｋ」

「知らねえな。なんだそりゃ」
「知らないの!?　Vに勤めてて!?」
　娘に叱責されても知らないものは知らない。
「今は出稼ぎで別会社だからな」
「何？　左遷？」
「違うっつうの。で、話の内容は？」
「全世界の人が遊ぶオンラインゲームの中で、一人のキャラがログアウト出来ないまま彷徨ってる感じ」
「面白さがわかんねえよ」
　もっと本を読ませるべきか。娘には国語力が足りていなかった。
「うまく説明出来ないしかなり古いけど面白いよ？　当時メディアミックスとかしてたみたいだし」
　そう聞いて喜麒は鞄からウェアラブル端末を取り出した。カチューシャのような端末を眼鏡のように装着し、端末から延びた電極を手早く耳の後ろに貼り付ける。
　ウェアラブル端末が電脳化を世間にあまり普及させられない理由の大部分だ。電脳化は後遺症の危険がある大手術を必要とするのに対し、ウェアラブル端末はそれを必要とせず電脳にこそさすがに劣るがそれに準じた操作を可能とする。どちらが普及する

かなど一目瞭然である。
　ネット検索に『．ｈａｃｋ』と掛ける。……出た。随分と古い。絢麗はおろか自分も生まれていない。
「こんな古いもんどうやって見つけたんだよ」
「友達の紹介。なんでも私とおんなじ名前の女キャラが出てくるんだって」
「言っとくが違うからな」
「みたいだね。友達にも言っとく」
　名前繋がりで紹介された訳か。それにしても本社の製品とくれば、知ってしまった以上見ない訳にも行かない。
　絢麗にソファを少し開けるよう促す。
「え、一緒に見るの？」
　空いた空間に腰掛けながら、「自社製品じゃあな。今何話だ」
「たしか３話くらい」
「なら最初はいいか。ポテチ開けるぞ母さん」
「やった！　コンソメ頂戴！」
「はいはい」

娘も自室で眠りにつき、喜麒は夫妻の部屋で妻と一緒に寝床に入りウェアラブル端末を操作していた。

・ｈａｃｋという作品はオンラインゲームを舞台としたもののようだ。それを踏まえてか絢麗は作品を見てこう言っていた。

「なんていうか、当さんみたいだよね」

（未帰還者か……）

作品内での単語を思い返す。言い得て妙ではあった、作品内での使い方とは異なるが。植物状態で眠り続ける当が、何処か別の世界で元気に走り回る、そうならばどれだけ当は救われている事だろうか。

眠り続け、実の親には捨てられ、喜麒は堪らず引き取る決心をした。隣の妻も、娘も快諾こそしてくれたが、もしそうならなかったらどうなるか。昼間の医師の言葉が思い出される。

「ベッドに端末は持ち込まない約束でしょ？」

「すまん。そうなんだがな」

妻に窘められても喜麒は作品の検索をやめられなかった。自分がオンラインゲーム

に携わっているからというのもあるかもしれない。
だがこれは功名だ。この作品の発表当時はそんな事を考えもしなかっただろうが、今の技術なら過去の空想が現実に、手段に変わる。
「なあ」
「何？」
「賭けに出る」
「そう」
「聞かないのか」
「当くんでしょ？」
「ああ」
端末を外し妻の顔を見た。何も知らず惚れ込んだ顔だ、初めて会った頃と何一つ変わらない。
「家族四人、皆でご飯を囲めるのよね？」
何も言わずに抱きしめた。

それよりひと月。方々に本件を持ち込み、ＧＯサインが出るまで足を棒にし、喉から血が出るかと思う程にプレゼンを繰り返した。企業の私物化と言う輩を真っ向から打ちのめし、たったひと月で実行段階までこぎ着けた。

「先生、お願いします」

「……委せて下さい」

今、当が手術室に入っていく。

不安な事この上ない。この最初の一歩に躓けば、全てが水の泡になる。

――電脳化手術。

喜麒は当を電脳化させ、あろう事かゲーム『スーパーロボット大戦オンライン』の中へ飛び込ませようとしていた。

・ｈａｃｋとは逆。現実世界で目覚めないのなら、ゲームの中、電気信号の坩堝の中へ放り込んでその脳へ刺激を与え続ける。

医学への協力という特例として電脳化の認可は下りていた。スーパーロボット大戦オンラインを選んだのは、そこしか知らなかったからだ。

「……当。待ってろ」

必ず、目を覚まさせてやる。
そこにあるのは義務と、決意と、父親としての責務。
喜麒は手術室への扉が閉まるのを、瞬きもせずに見つめていた。